



I はじめに

分科会基調は、「討議課題」を共通確認した後、分散会では、「地域における様々な人権課題を明らかにしつつ、差別解消に向けた取り組みを通して、人と人が出合い、つながっていくこと」「社会の状況が変化の中で、生きづらさを抱えて暮らしている人を多様なネットワークにより、つなぎ、支え合うまちづくりをめざし、生活課題と結びついた実践活動」「今もある部落差別が、あるのになんかいないことになっていることに対して、自分たちがどう向き合い、誰とどんなつながりを作り、その事実をどう変えるのか、どう変えようとするのかということ」「今回の学びを、今後の自分の取り組みにどう生かしていくのかということ」をキーワードとして、人権確立をめざすまちづくりを進めていくことを提議し、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—⑩

なんで部落差別が見えんのや～人権とまちづくりに取り組む廣瀬自治会の今～（滋賀県人教）

—主な質疑と意見—

鳥取 今日、会場に来る電車の中で、X(旧ツイッター)で大会に参加することを報告すると、滋賀県長浜市の56歳になる友人から連絡があり、「同和教育なんて今でも開催されているのですね、20年前ぐらいになくなったものと思っていた」という内容だったので驚いた。私の住んでいる地域でも、学習会などを行うといつまでもするのかという否定的な意見はあるが、年配の方などの協力もあり、少なくなってきたと思っていた。あまりにもリアルタイムだったので報告した。同和教育より人権教育だという意見もあるが、私自身は、部落問題はしっかりやるべきだと思っている。

愛媛 二つ質問がある。長浜市の人権施策推進課

に粘り強く働きかけをしたということだったが、市の深く切り込まない理由は何なのか。私の住む西予市では、「同和教育ばかり取り組むな」という意見が多く、グループワークをしていても、「寝た子を起こすな、差別がなくなると困るだろう」などの意見があり、うまくまとめることができない。こういう時、どういう言葉を返せばいいか。

報告者 長浜市は、行政推進員として、市の職員が各集落に張り付いている。毎年1回は人権問題について集落を集めて研修集会を行う。しかし、最近では、部落問題を扱った研修は一つもない。他の人権課題を扱っている。今、現在、雰囲気としては、部落の側も、大きな集落があるのだが、その人たちに「寝た子を起こすな」という雰囲気があるので、部落問題だけが人権問題ではないというのが市の見解である。いずれにしろ、今、部落差別は、見えにくくなっている。例えば、結婚差別、部落出身者は、いつ結婚差別に出会うかわからない。この問題は、被差別部落の人間だけが話をするのではなく、相手側の人間も悲しい思いをするということを知ってもらわなければならない。こういう話を市職員にもした。今年は、隣保館の職員の課長にも理解があり、共同事業を行うことができ、そういった研修会を開いている。市職員は、被差別部落の人間の目を気にしてやってきたというように私は思う。相手の意見を聞くだけではなく、自分の考えで自主的に行うことが大切だ。まずは、その集落、人を知ってこそ、本当の要望を聞くことができる。

報告者 二つ目の質問だが、周りに対する言葉かけを意識している。当たり前だが、周りが変われば変わってくる。一つは、LGBTQも大事だけど、部落問題も大事と。人権課題は、共通することも多い。これは大切なことである。自分から名乗ることができないという点では同じである。部落問題は古い問題ではなく、新しい学びである。二つ目に、部落問題は人と人との結びつきが感じられる問題である。三つめは、差別は被差別の側に責任を求めないということがきちんと確立されている。

埼玉 「寝た子を起こすな」という話で、ネット上での部落差別はひどい、特に、埼玉県も部落探訪でインターネットに出ている地区があり、首長が許せないということで申し立てをしている。一方、2002年以降、同和教育が衰退してきた中で、部落問題さえ知らない若い教員がいる。いろいろな課題がある中で、考えていかなければならない問題であ

る。高裁では、差別されない権利が認められたが、自分を出して闘うのはしんどい。今後、どう伝えていくのかを考えていかなければならない。

滋賀 今年、滋賀県で全国高校生集会と青年集会が開催された。この中で、今ある部落差別にどう向き合っていくのかと考えたとき、自分の当事者性に注目した。当事者を考えたとき、差別されてきた人だけではなく、差別をなくそうとしている人、部落差別を知らないままほっておけばいいと言っている人は部落差別を残していることになる。その人たちも含めて、みんなが当事者である。一人ひとりが部落問題を通して、差別から目をそらしてきた自分にベクトルを向け、寝た子を起こすなどという問題に向き合うことが大切である。

報告者 いろいろな人権課題があるという取り組みを行っている。若い人たちに対して、自分たちが暮らしてきた生活の中にある課題に気づいてもらいたいが、関心が低い。若い人たちは、これから人権問題を支えていく人たち。人権課題を自分事として捉えるための呼びかけは、どうしたらよいか、何かいい方法があれば教えてもらいたい。

報告者 若い方というのは、子ども会の親たち世代になると思うが、私の感覚では、高齢者の方は頭が固く、難しい人が多い。若い人たちは、自分の意見をしっかり言うという教育はなされており、悪い方向にもいい方向にも進む可能性がある。研究会のメンバーは40～50歳代だが、まずは自分の子どもに話をする。また、自治会の活動に顔を出し、声をかけていく。そうすることで、学習会にも参加するようになり、一度参加するとこれはあかんと感じ集まってくる。また、消滅していた子ども会を今年発足させ、クリスマスにむけて、まずは楽しいことからスタートする。老人会もなくなっているが、これも来年度から立て直そうとしている。自分たちの熱い思いで、まずは、集落を立て直し、色々なところに発信していく。教育は非常に大事だと思う。部落差別をはじめとする人権問題に対する考え方を身につけるうえでは大切であり、これから育っていく子どもたちにとっては、幼・小・中学校における学びは重要である。

—報告 2—⑰

朗読劇「私の歩んだ道」に差別解消の想いを込めて！
(埼玉県人教)

—主な質疑と意見—

岡山 特別支援学級に在籍する子どものお母さんの「給食をみんなと一緒に食べさせたい」という言葉があるが、お母さんは他のお子さんと同じように、「通常学級の教室で、みんなと食べさせたい」という願いを持ったということだったのか。

報告者 その通り。1年前ぐらいに、お母さんの方から「通常学級で一緒に食べさせたい」という要望があった。その時、自分の中で、「昔からやっていたことだから」と、お祭りに参加できなかった部落の子どもたちのことと重なった。今は、通常学級で食べられるようになっている。超えるべきハードルは同じようであった。

愛媛 特別支援学級の生徒が通常学級で給食を食べるようになるのに、超えるべきハードルがあつて大変だったという話があつたが、お祭りの時は、本村の方に声をかけていかなければならなかった。この時、学校と同じように越えなければならない壁があつたと思うが、その点、教えていただきたい。

滋賀 そのあたりの経緯をもう少しお話しただけるとありがたい。やはり、「昔からやっていたことだから」ではなく、そういったことを一つ一つ変えていく中で、色々なことがあつたと思う。参考になる話なので、可能な範囲でお話しいただきたい。

報告者 給食の件は、子どもたちのために、親と一緒に越えていきたいと思った。最初の時は、学校に対し、勝手にやつたととらえられてしまった。初めに、相談しておけばいいだけの問題だったが、うまくいかず、話がこじれてしまった。その後、学校全体、みんなで取り組むということで、話し合いを行い、一つ一つ乗り越えながら進めた。まだまだ、クリアしなければならない点もある。

報告者 本村と部落の間で、何度も何度も話し合いを重ねた。子どもたちの「お祭りに出たい」「お祭りに行きたい」という思いを本村の親たちに訴えて、何回も何回も話し合いを行った。本村の人たちも「それは悪かった」と気づいてくれた。そして、分かち合えた中で子どもたちが参加するようになった。何回も話し合いをする中で、それは差別だったとわかってくれた。やはり、しっかりと伝えていかなければ差別はなくならないと思う。

滋賀 給食のところで、学校の空気として、子どもが言ったこと、子どもと一緒に食べたいという時、教職員の意思決定という問題もあると思うが、子どもと一緒に食べたという中で、交流を保障することも大切なことだと思う。先生の想いと学

校、そこに至るまでの状況はどうだったのか。

佐賀 周りの職員に支援する人はいなかったのか気になった。文科省が進めているインクルーシブ教育システムは、立場の違う人になかなか伝わりにくい。その点、どのような状況だったのか。

報告者 自分の中の意識はインクルージョンだったが、関東圏の多くの学校は、インクルーシブというかたちよりも、分類上の差別問題という意識が強くなり、私の学校では、これまでのシステムを変えるということが今までになく、特別支援学級で食べるということが前例となっており、そこに自由度はなく、この前例を変えるということがなかった。でも、「昔からあったことだから」で済ませてしまえば、自分が差別者になるという思いで、時間はかかったが行うことができた。

協力者 一緒に食べるようになって、どうなったか。

報告者 希望する子が食べた。生活を同じにすることが、子どもたちにとってどんなに有意義なことか。お互いを理解する上で貴重な体験になっている。

大阪 先ほど、学校でしっかり教えてほしいという話があったので、中学校で社会科の教員をしているものとして話したい。特別に部落問題を教えるということはないが、社会科の教員が、部落問題をどう認識して、教えるかというのは非常に大きな問題である。その時に、部落問題を子どもたちにしっかりと認識させ、考えさせなければいけないが、そうできている人はなかなかいない。知識として部落問題を学習してもあまり身につかない。実際に部落の人たちの生き様にふれ、思いを聞きながら、部落問題を伝えていく教育をしていきたい。

埼玉 学び直すということも踏まえて、先ほどの報告で、「あえて、寝た子を起こして」という言葉があったが、寝た子を起こすような話題をどんどん出して、手ごたえをどう感じているのかが気になる。そこをお聞きしたい。また、私は中学の社会科を教えているが、部落の人たちの生き様について、授業の中で話してもらう機会があるのだが、生徒たちはよく聞いてくれ、手ごたえを感じる。やはり、そういう授業を行うことは伝わりやすい。部落差別は、今、見えるかたちでどうなっているのかなどのお話に関心を持って聞いている。若い職員に対して、どのように伝えていくのかがこれからの課題である。私の方も、情報発信しながら輪を広げていくことをしているが、報告者自身がどう輪を広げようとして

いるのか教えていただきたい。

報告者 私はあえて、寝た子を起して、本当の差別の実態を、差別とはどういうことなのかを伝え、差別された人の話を聞いていただき、寝た子を起こすことでわかっていただけるかなと思っている。差別の実態を知らないと、言葉で相手を傷つけることは、往々にしてある。だから、正しい知識を学んでいただき、当事者の想いを自分の想いと重ねあわせれば、差別はなくなっていくと思う。また、小学校の子どもたちがタブレットを操作しているが、インターネットの中には、間違った情報も載っており、正しい情報にふれることを先生方にはしっかりと教えていただきたい。

—一日目総括討論—

滋賀 中学校の教師をしている。私の学校では、6年前に、差別をなくすのに大人も子どももないということで立ち上がり、自分のクラスで差別をなくしていきたいという思いの時間を取るようになり、今も続いている。子どもたちから上がってくる差別の現実の中には、色々な差別が上がってくるが、部落差別に関するものが一番多い。受けた差別のこと、今感じている部落のこと、出会うかもしれない差別の恐怖を子どもたちは語れない。子どもたちに語れなくさせているのは何かと考えた時、差別に出会ったことがないからという理由で、差別をないものにしてしまっている今の社会に原因があると思う。私たち職員にとって、部落差別の問題は、子どもたちの命、人生に関わる深刻な問題である。自分が子どもの時に感じていたことを、今の子どもたちにも感じさせなければならぬという悔しさがある。つながるという言葉は、今日のテーマでもあり、ある意味便利な言葉でもあるけれど、今ある差別に立ち向かっていくためには、ここだったら話せるという場所、この人だったら語れるという環境を作っていくことが大切である。

岡山 報告の中で、「自分の恥」という言葉が出てきて、胸がジーンとし、胸を張って自分のことを語れるということは素敵なことだと思った。二つの報告を聞きながら、部落問題に関わり、広げたいという思いで活動していることがすごいと思う。私自身は、自分の持っている差別性と向き合うということをテーマとして、学び続けるということに関わっている。仲間を広げるという点では、なかなか広がっていかないが、自分の身近な人たちに声をかけ、

来てくださる方は何らかを学びたいと思ってきてくださる方であるので、歴史学習をしながら、自分自身のことを語ってもらったり、みんなで自分のことを話したりするなどして、一人でもいいから広げていくことを行っている。今まで、市人権で部落問題を取り上げることはほぼなかったが、今年、部落差別に関する講演をした。これは、一緒に学習をしている仲間がいたからできたことである。しかし、一度の講演で終わるのでは意味がない。自分の学んだことを子どもたちに伝えていくとか、色々な方法で続けていくことが大切である。これからも、身近な人に自分が話せることを話しながら、一人でも向き合っ話せる人を増やしていくということと、自分自身が差別事象と出会った時にすぐに声をあげることができるようにしていきたいと思っている。

滋賀 差別事象が起こった時に事務局をさせていただいている。ある高校で、差別落書きがあり、誰が書いたのかとなった。高校の先生からは、「誰が書いたのかわからなかった」という報告があった。学校の中で差別事象が起こった時に、差別対策会議の中でしっかり話し合われていないと感じた。教師や大人が、子どもたちに対して差別のことやどうすればいいかということや語り、自分の差別性を語りできていない。それなのに、子どもたちに「差別についてどう思う」と聞いても難しいのではないか。学べば学ぶほど、自分の身の周りで、自分が差別していないかということや問いかけるようになった。自分の家族や友人など、身の回りの人にどれだけ語れるかが大切であり、身の回りの人と話すことで、差別をなくす側の人を増やしていくことが、差別をなくしていくことにつながると思う。

大阪 小学校の教師をしている。私自身が、保護者が差別発言をしているところに出会い、すぐに対応できなかった。その発言とは、「今は部落差別なんかないのに」であり、私は部落差別はあると反論するのが精一杯だった。その後、その人と会った時に話させてもらったことは、私の学校では、部落問題に取り組めていない時期があったが、その頃に卒業した高校生が、「うちの村は何で怖いと言われるのか、何で貧乏なんやろう」などという思いがあり、それを隣保館の職員が聞いてくれていた。本当は、「怖いということがおかしい」と伝えなければいけなかったのに、学習が十分ではなかったために、どこに差別があるか見抜けなまま卒業させ

てしまった。また、部落差別のことをクラスで話した子どもがいたが、その時の保護者の方が、「今やったら、周りにこの子の味方がいっぱいいる、だから、今、差別にあつたらいい」という発言をした。自分の子どもが差別にあつたらいいという親はいない。その方は、将来差別を受けるかもしれないので、強い気持ちでいてほしいという思いがあったと後から聞いた。これらの話をする中で、その方は、今も部落差別があることは知らなかった、自分は差別していたかもしれないと理解してくれた。私は、子どもたちには伝えるけれども、保護者に対してはどこか諦めていたところがあったが、正しい知識を伝えることの大切さを感じたできごとであった。今、地域の方と一緒に人権サークルに参加している。地域の方の今までの部落差別の取り組みなどを聞かせていただいているが、その中で、子どもたちにしんどい時は、しんどいと言っていいという話を聞いた。地域の中で居場所づくりの活動が広がっている。学校もしっかりと取り組まなければならないと感じた。

大阪 教育の立場で話をしたい。自治体のトップの判断で、部落問題学習をできない。ユーチューブに動画がアップされたり、将来、結婚差別に出会ったりしたとき、どうするのかと心配になる。正しいことをきちんと教えなければならないと思うが、それができない。私たちにできることは、将来困った時に助けてと言える仲間づくりをすることである。本当は、差別をなくしていくのは教育しかないと思っている。小さな時からの出会いと学びが大事であると思う。

滋賀 教師は課題をあげることは得意だが、どうするのかを見出せない。では、どうすればいいのか。今日のテーマの一つに、見えにくくなってきた差別というのがあった。行政の基本は、実態を把握することから始めることである。関心のない人にこちらを向いてもらうのは、科学的根拠を示すこと、数字で示すことだと思う。滋賀県では、5年に一度差別に対する市民意識調査を行っている。しかし、その数字を紐解く人の意識によって、全然違ってくる。この15年間、偏見や差別に対する意識は、ほとんど変わっていない。感覚ではなく、数字で示すと誰も反論できなくなる。そうすると、部落問題に対する偏見も、外国人に対する偏見も、障がい者問題に対する偏見もみんな一緒だということがわかってくる。どれぐらい差別があるかないかという問題

は、そういうかたちで共有することからスタートしないと前に進まない。各都道府県で意識調査をしているのか、その抽出の仕方はどうなのか、それをどう生かしているのかを教えてください。また、若い人がとか、高齢者がとかいう問題が言われていたが、この調査によると、部落問題については、20代 30 代の方が、50 代60代の人よりも偏見が強いという結果が出ている。ようするに、学ばなければ知らないという発言がたくさんあったが、それは本当かと。偏見というのは、学んでも残ってきたという繰り返しにもっていかなければならない。具体的な数字を根拠に語らなければならぬ。私たちは、正しい知識を正しく伝えるというが、現場は間違っただけを言っただけはいけぬ、正しいことしか言っただけはいけぬということがあって、若い教職員などは、自分の意見を言うことができない雰囲気がある。差別をなくすためには自分の意見を持つことが大事なのに、同じ意見しか言えないとなる問題だ。外に出ていったときに差別する人の方が多い。正しい知識とは何なのかをきちんと整理しておかなければならない。

埼玉 私は同教育推進主任を経験して、そこで大事なものを学んだ。私の母親は統合失調症だった。私が小学校の時から入退院を繰り返していた。このことは自分の中にしまっていて、病院にも行っていない。自分の中で部落問題と向き合うようになり、考えるようになった。自分は、成長するにつれ、どこかで人を評価するようになっていた。同和教育と関わっていく中で、精神障がいの方と関わっている人と知り合い、心豊かな人たちだということを知った。その後、日本の昭和の精神医療とは、薬を飲んで、病院の中に囲い込むようなことが多かったと知らされた。刷り込まれたイメージというものを、自分は部落問題を通して母親の姿から学び直した。これが差別なんだと思った。部落問題も、勝手なイメージで評価をし、差別している。思考停止をしていた。自分たちが持っている、自分の中に刷り込まれたイメージは、学習だけではなく、自分との関係の中で見直していく、学び直していかなければならない。運動の中で闘ってきた姿を示しながら、地域の中でつながってきた、今の同和教育に学び、今できることがあるのではないかと思う。**愛媛** 「寝た子を起こすな」ということがテーマになっていたので、この分散会に参加した。その思いで頑張っている人がいるということで励まされる思

いがしている。ある高校を訪問したとき、先生が「生徒たちは、中学校で部落差別を学んでいる。生徒たちに聞いても、高校で、部落差別を学ぶ意味がない」と言った。その先生は私の同級生で、とてもショックで、何も言えなかった。自分は高校の時に、先生と出会い、勉強を重ねて、友達にも自分のことを話せるようになったのに、未だに何も言えなかった。でも、次に訪問した高校は、先生の理解もあり、生徒も話よく聞いてくれた。なぜ、差別をするのかを話し合っていきたいと感想に書いてくれた生徒もいた。正しさというのは大切なんだけど、自分にとって、正しさとは何だろうと考えてしまう。差別する人に対して言い切れない自分の弱さがある。私の町では、公民館がなくなり、社会教育が衰退し、人権問題をやってくださいというと、区長から「部落問題はやりたくない」とはっきり言われた。友だち同士なら話せるが、あるべき立場の人に、言われると私はどういったいいのかわからない。人とつながることは大切なことだと思うが、私の町は高齢者が多く、人とつながる手立てがない。

—報告 3—⑮

「ハンセン病問題に学ぶ虹の会おおさか」の活動 (大阪府人教)

—主な質疑と意見—

熊本 文章の中に、お母さんが、「今は治ると頭ではわかっているけれど、恐ろしい病気と刷り込まれたから、今更考えを変えることはできない」というふうな、部落差別と重なるようなことがある。これは、大切なことで、頭ではわかっているけど、差別してしまうということは部落差別と一緒に思う。やはり、出会うことが大切で、私の知り合いの中にも、饅頭を差し出されたが、どうしても食べることができなかったという話がある。マイナスのイメージから入ってしまうと、差別をしてしまう。差別をする側が悪い。180度マイナスのイメージを転換して、差別する方が悪いんだという先生の想いが伝わった。でも、マイナスのイメージが先に入ってしまうと、なかなか、差別することがとり切れない。そういうことを踏まえ、正しいことを子どもたちに伝えるという部分で先生の考えをお聞きしたい。

報告者 子どもは今まで、5年、10年家族と培ってきた考えがあるので、私が1時間、2時間授業をしたところで変えられるものでもないと思っている。例えば、ハンセン病回復者の方と子どもが握手しな

ったら、「何でしないの」と聞きたい。「何で」と聞くことで、学び直しができるのではないかと思っている。親には、言うけれども、言っても無理だろうと思っている。まずは、子どもに対しては、「何で」と聞いて、卒業するまでにちょっとずつ、授業だけではなくて、日々の積み重ねだと思っている。普段のちょっとした言葉とか、日々の関りの中で子どもと語るようにしている。

埼玉 ハンセン病とコロナとは被る部分が多いなと思う。コロナ感染初期の頃に、埼玉県で初めてコロナに感染した方が自殺をしたという事件が起こった。なぜ、偏見は生まれるのか。コロナの時も、ハンセン病の時もそうだと思うが、誤った情報が広まってしまうことが要因だと思う。特に今回のコロナの場合は、メディアが民衆をあおるような情報を流したと思っているし、国の情報も責任のあるものだったかどうかと思う。こういうことは繰り返してはいけない。そこで、今回の誤った情報の広がりやメディアの情報のあり方についてお聞きした。

報告者 普段の情報の伝え方とか感じ方については、伝えていかなければならないと思う。ハンセン病も誤った報道が、病気の人を苦しめる、そこに圧力があるということもみんなが認識しておくことが必要だ。コロナの時も、国の方針、マスコミの報道も、外出してはダメだ、同席してはダメだ、マスクをつけなさいという報道が流れ、自粛警察ができ、感染しづらい思いをした人がいた。ハンセン病の時も、国の情報認識を得ながら報道してきたマスコミとつながる部分はある。ただ、正しい知識、理解、情報ということも非常に大事なので、信頼できる情報、情報元から情報を得ていく、信頼できる方から情報を得ていく。顔が見える関係を持っている人からの情報を伝えていくことが必要だ。そんな情報は知らなかった、差別するつもりはないけれど、知らないことは不確かな情報に飛びついてしまうという認識も大切である。

滋賀 ハンセン病については、長島愛生園に行ってお入所者の方の話を聞いたことがある。仲間の中から立ち上がって闘っていくということは非常にしんどいことであつたと教わり、また、自分の内面にある差別的なところに気づいて愕然とした。先ほどから出ている、正しく伝えるということは大事なこともかもしれないが、それを聞いた人たちが、自分はどうかと問うていくことにこそ学びがあると思う。今日は、分かっているものと分かっていない者と

の対立的な議論になっているような気がして、私はちょっと違うのではないかという気がしている。常に、自分と社会との関係においてどうなのかということをお学ぶべきであり、社会をどう変えていかなければならないのかということをお議論していかないとはいけない。本質的なところは、社会を変えていかなければならないと思っているので、そういった議論をしていただきたい。

岡山 キム・テグさんに学校現場に来ていただいて、子どもたちの前で話をしてくださった。キムさんが教員に対して必ず言うことが、「正しいことをしっかり子どもたちに教えてください」とそれを繰り返し言われた。そして、子どもたちに伝えたいことは、差別との激しい闘いをしてきた方なのに、すごく優しく、すごく素敵な方。子どもたちに出会わせたい、本物に出会うことで、子どもたちは変わっていくのではないかといつも言っていた。

三重 報告者の「お母さんには、なんぼ言っても無理だ」という発言を聞いて、部落問題学習や人権学習をしている時に、一番大切にしていることは、自分の親が間違っていると思ったときに、人権学習をして帰った時に親と話してみるかと言って、ちょっとでも、親と話ができたとき、人権学習をしているかがあるのかなと思う。一つ質問だが、ハンセン病回復者の高齢化が進む中で、今後どう伝えていこうとしているかお聞きしたい。

報告者 当事者の方も高齢化していて、ビデオを貸してくださってそれを活用するとか、後は、回復者の方が本をいっぱい出してくださっているのだから、それを活用させてもらっている。

報告者 つながりを大切にしたいと考えている。例えば、隣保館でハンセン病の問題を取り上げるなどが考えられるが、その時に、そこで安心して話ができる関係が作られるのかという問題がある。本当に、激しい思い、つらい思いを話していただけるかどうか。自分の中にある差別性を問いかけることにもなるが、そのことによって、信頼関係、「安心して話をさせていただけますよ」と自信をもって言える関係が作られればよいと思う。

大阪 一市民として差別と闘っていかなければならないと改めて感じた。差別を繰り返さない学校づくりをしていきたい。そのための一つの柱としては、無知、無意識、無関心にならないようにしていきたい。地域の方々と話している時に、「一人一人の顔がちゃんと見えるようにしていまよ」と言われ、

三つの柱と共に大切にしている。報告者に質問だが、私は、1981 年生まれで、エイズが大きな社会問題になった時に、私自身恐怖に押し込まれて、そこにある差別を見抜くこともできず、おかしいと感じることもできなかった。エイズだけではないが、今でもそれはある。報告者が小さな時に、これっておかしいぞと気づけたこと、そこに、感性や力強さと、力量のようなものを感じるのだが、それは何かを教えていただけたらと思う。

報告者 残念ながら、母親の影響はない。私は双子で、小さい時から、もう一人はよくできる子で、親は、女の子という感じに育てたかったようだ。しかし私は全く逆で、成績も悪かったし、お転婆だったし、親からはいいように思われてないという思いがずっとあって、大人とは違うという劣等感のようなもの、反発心があって、人と違うという思いがあり、残念ながら、結局、こんな感じになってよかったなと思う。

滋賀 人権教育を考える中で、道徳という言葉が出てきた時に、どうとらえたらいいのかと考えてしまう。差別をなくしていこうとしている時に、どれぐらい教育になるのか。むしろ、差別の現実を知って、そこに寄り添うということよりも、もっと大きな現実を見越したうえで取り組んでいく。同和教育が、社会行動に切り込んでいくというより、ハンセン病回復者の気持ちを考えるということの方が強いような気がする。同和教育の中でハンセン病問題をとり上げるというよりも、子どもたちに対して、もっと違うやり方で伝えていきたいと考えているのか、お気持ちを教えていただきたい。

報告者 私のところの市は、同和教育はできてない。ただ、道徳と人権学習はそもそも違うものだと思っているので、道徳の教科書にハンセン病問題が載っているの、ハンセン病問題を知るきっかけになるのではないかと考えているだけで、人権学習の中で取り上げるべきだと思っている。

—報告 4—⑭

美作騒擾の学習を軸とした加茂人権問題研究会の取り組み

(岡山県人教)

—主な質疑と意見—

熊本 美作騒擾のいきさつについて教えていただきたい。また、最後の方に「美作地域の農村では部落差別に抵抗する農民はほぼ皆無であった」とあるが、どういうことか教えていただきたい。

報告者 美作騒擾のいきさつについてだが、明治の初期の改革全てが、農民たちの暮らしを今まで以上に悪くするという方向であった。明治政府が作ったものすべて、徴兵令にも反対したし、解放令もそう、農地改革もそう、全てに反対したということ。県庁役員宅や小学校を含めたすべてを壊していったわけだが、特に、被害を受けたのが被差別部落ということだった。

報告者 もう一つの質問についてだが、1873 年、当時の農民は、解放令を知っている。解放令を知っているからこそ、これはダメだと、取り消せと言った。こんなものが出たら、農民の生きがいなくなる、次から次へ、70 近くの農村から決起が出て、当時は津山県だったが、津山県が新政府にこういう声があるから、解放令を止めてくれと要望を出した。でも、そんなことは通らない。そういう体制なので、部落差別に抵抗する農民はほとんどいなかった。資料には全くない。

福岡 美作騒擾を学習する中で、差別は自らの中にあるということも学習している。福岡県には、筑前竹槍一揆というのがあって、小学校や中学校でもこの一揆を学んでいこう、学びを広げようという動きがある。美作騒擾の出来事について、小学校や中学校で取り上げているのか、または、取り上げようという動きがあるのか教えていただきたい。

報告者 私の知る限りでは、県内の小学校、中学校で取り上げているというところはない。岡山には、もう一つ、渋染一揆があり、そちらの方は教科書にも載っており、よく取り上げられているが、美作騒擾は悲惨な状況が前面に出てきて、取り上げて勉強してみませんかと問いかけても、「ちょっと無理ですね」と言われてしまう。自分が実践したのは、学校全体で取り組むというのではなく、社会科の明治のところで取り上げた。この事件が、あまりにも悲惨なために、地元でも知らない人が多くいるぐらい、封印されてきたということもあるので、こういうことがあったんだということを知ってほしいという願いから取り上げた。なかなか広まらないが、実際の資料はある。伝えることに意味があるのか、何を伝えたらいいのか、襲った側の農民の心情、そこまで非情にむごいことができるようになったのは何なのか、などをいつも考えさせられる。農民たちは襲ったわけだが、「一人ひとりが襲ったらいかんといったのか、行きたくはないけど、仕方ないからついて行こうかな」と思った人もいるだろうな

どと考える時、自分がその立場だったら、行かないと言えるだろうかと考えてしまう。いろんなことで悩むことが多い。考えさせられる、それが今の部落差別問題に直結していて、自分自身に問われているような気がしている。実際、広めてほしいという思いはあるが、そのままのことを続けてほしいという願いはある。そういう思いで、これからも学習を続けていきたい。

報告者 教材とか、学習についてお答えする。私は、中学校の国語の教員をやっていた。国語の漢詩が出てくるときは、必ず、南山の詩を紹介した。私一人の判断で行った。その時、子どもたちは、「何故、農民はそんなことをしたのか」「農民は、線香をあげてほしい」という感想を言ってくれた。私は、できる場所では、誰でもできるのではなかと思っている。

岐阜 美作騒擾は、徴兵令、解放令などの新政府の取り組みに対する農民の反発で一揆がおきてしまったことが原因だということはお伺いした。そしてその矛先が部落の人に向いてしまった。報告の中で、正一郎さんが、「祖父が6歳の時に暴徒に襲われた」という被害者の側の話を聞いているということだが、もう少し具体的に教えていただきたい。また、加害者側の指導者の資料が出てきたという話があるが、その時、倫典さんがどういうふうにしたか、またどういうふうに語っていたのかについても教えていただきたい。

報告者 正一郎さんの話をどういう思いで聞いたのかということだが、正一郎さんが6歳の頃にお爺さんから聞いた。この時、お爺さんが言いたかったことは、「お前らの時代は、いい時代になった。あの、明治初年にはすさまじい差別があった。学校にも行けなかった。お前は学校にも行けてよかった。学校に行って、しっかり勉強をせい」ということだったのだろうと、正一郎さんは私たちに言ってくれた。正一郎さんの生まれた年で言うと、今99歳なので、この方が小学校に上がるころは、差別のない社会になっていたわけではない。正一郎さん自身も差別のある学校生活を送った。自分が級長になろうとしても部落の子だからと外された。でも、明治初年の頃にあった差別と比べたら、自分は頑張らないといけなかった。それから倫典さんが、農民の側である。農民の側が土地を取られたという事実はある。倫典さんは、とても素敵な、地域で慕われた曾爺さんが、こんなひどい事実があっ

たということ、この書いた資料を見てショックを受けた。「参加しなかったら罰金を取る。一揆から帰ったらこの村に居づらくさせる」と書かれていた。曾爺さんはリーダーだから。倫典さんはこの事実を農民側からしっかりと伝えたいと思っている。

福岡 この大会で、自分の中の差別性を考えている。美作騒擾の中で自分も大事にしたいと思うのは、差別は差別する側の問題だと思っているので、農民側の立場にたつ時に、それでも部落の人を助けた農民がわずかにいたということを取り上げていただいている。その中に、学びがあると思うが、そのことをもう少し詳しくお話ししたい。

報告者 助けた農民が、その人たちが部落の人だとわかっていたかどうかは、わからない。別の部落の人たちが被差別部落を襲撃に行こうとしたときに、「もうこれ以上は行くなと、私たちが行かなければならないのは違うだろう」と一人の人が止めた。それは、勇気ある人ではないかと思う。その止めた村の人たちは、この人のことを表彰してくれと、表彰依頼まで出している。また、南山を助けた村の人たちもいるが、その後も伝えられていない。南山も親戚の人たちなどに、あの村のあの家に自分がかくまわれたと伝えている。そういうような事情で、多くは伝えられていない。もう一つ、私が直接聞いた話は、ある村で9人が殺害されたが、話してくれた人の曾爺さんは隣村の人に救われた。つまり、この人間はいい、この人間は悪いと選ばれたわけである。話をしてくれた人は、「殺されかけたときに、隣村の農民が、この人は神様みたいな人だ。正直でいい人だと言って助かった」と言っていた。私も農民側だが、誰一人としてこういう話を知らない。全く知らない加害者の側の歴史を、一つずつ知っていこうかなと進めている。

福岡 福岡で筑前竹槍一揆を教材化する時の話だが、状況は違うがここまで詳しく私は知らない。筑前竹槍一揆で被差別部落を襲撃するということはあった。何をどう教えるかという時に、私は、被差別部落の人たちが、一揆に参加しないという選択肢を選んだことが一つ要因にあると思う。一つの村では、長たちが集まってどうするかという方向性を決めていた。被差別部落の人たちは参加しない、農民は、参加しなかったら罰を与えると言った。でも、もし、参加していたら一番危険な役割を与えられるということを村の人たちは知っていたと思う。もう一つは、焼き討ちを恐れた。その時の

福岡市の話だが、学校が焼き討ちされている。その後、村の人たちは、自分たちの財を集めて学校を作った。部落外の人よりも、どこよりも早く学校を作った。それが部落解放の象徴になる。教育の中で、一番に子どもたちの未来を作ろうとした。その考え方が素晴らしいと私は教えている。命を繋いでいくすばらしさを伝えている。教材化するとき、史実として結果、何もできなかつたで終わるのではなく、そこから村人たちの団結とか、みんなのことを考えて行動し、何かを生み出していったということを教えることが大切である。

—総括討論—

滋賀 来年度、被差別部落の教育実態調査を行う。うちの市では、5年に一度市民意識調査など各種調査を行っている。数字が出てくるので、その数字を、その後の教育や行政の施策に反映している。今年度その準備をする中で、この数字をどういうふうにすると、部落の現実を表しているのかということが一番に、部落の人や関係者と相談している。今までのやり方を変えて、大学の先生とも相談している。なぜ、大学の先生と相談しているのかというと、この10年やってきたことが変わらない現実があり、新しく科学的視点を導入するということで行っている。部落の中にも、もう差別はないという人がいるが、それは、私たちが話してもらえない関係がないのだと思っている。もうないと言っていることが、そのまま数字に出てくると、部落差別はもうないということになってしまうので、その点をどうすればみえるようになっていくのかを、今考えている。そのための担当者会議を持っている。そこでの話が、どんな調査が大事で、今の課題が何で、どんなことができるかを話し合う場になっている。いろいろな人が入っているので、そこでの話の中に、今の地域の中に保護者が取り残されているとか、自らの力でフィールドワークができるように部落学習をしていこうかなどのお話ができおり、これが、解決につながっていくのかなと思っている。こういう話の中から実態調査につながっていけばよいと思っている。

熊本 どうしたら差別をなくしていけるのが課題である。私は、子ども会学習会を毎週月曜日に行っている。子どもたちは、まだ、差別をなくすことはできないが、学習会の子どもたちを見ていると、バカとか、チビとかと言っている。私自身も、気づか

ないところで人を傷つける言葉を使っていると思う。私たちは、相手はどう思っているのかという人権感覚を磨いていかないと、差別はなくならないと思っている。自分の人権感覚を磨いて、相手の立場を考えていくようにしていかなければならない。埼玉 意識調査について、東日本は、西日本に比べて取り組みが遅れていると言われていた。2002年、特措法が失効して以降、部落差別はあるが大事にしないということで、市民意識調査で部落問題にどう取り組んだらいいかを学んできた。実際に、どういう研修が必要かという時に、自分は部落差別を知らないから学びたいと思っている年代がいて、埼玉県の研究集会で、地域に生きる人の自分の被差別体験を話してもらおうようにした。一人のお婆ちゃんは、先生方の前で部落のことや色々な思いを伝えてくれた。地元でそういう方がいるのだからきちんと話を聞きなさいということで、話を聞いた。今までの人生は、差別におびえてきた人生だった。一つ一つの出会いがなぜ必要だったかが自分の中で見えてきた。今、埼玉では地域の中で学ぶということを行っていて、人に話すことでほっとしたということもあり、そういう出会いを大切にしたい。

滋賀 言葉にこだわりたいと思っている。自分の中では、当事者とは被差別の立場の方だというふうに使っていた。でも、この社会の中では、みんなが当事者だとして使わないと、当事者でないからどうでもいいという使い方になってしまうので、当事者は私なんだと確認していかないといけない。特に若い世代には、当事者は私なんだとはっきり言わないと、若い世代には受け止めてもらえない。当事者は誰なのかをはっきりしないと、LGBTについても、LGBTでなくてよかったというふうになってしまう。同じように実態調査という時も、差別の結果としての実態調査とあえていわないと、差別はどこにあるのかというと、被差別部落ではないところに差別の実態はあるのであって、結果として被差別部落に差別の実態が現れるのである。実態という言葉を使う時にも、それは明らかに違うんだということをわかっておかないと、大事なことが伝わるようで伝わらないと思っている。

滋賀 自分も社会人になってから、ハンセン病のことを知った。その時に、自分の無知、無自覚、無意識に気づいた。でも、もし知っていたらと考えたとき、知っていたのに行動しなかつた、無行動の自分

がいることに気づいた。自分は、部落差別については、若い頃から取り組んできた。取り組む中で、何で知っているのに行動をしてくれないのかと思ってきたが、ハンセン病のことを考えたとき、同じような自分がいることに気づいた。地元で、ハンセン病回復者とお会いする機会があったので、当時小学校3年生の娘と一緒に会いに行った。強制墮胎の話になった時、2年前に出産した友人がショックのあまり失神してしまった。彼女が戻ってきたのは、お弁当を食べている時だった。「差別の現実を学ぶ、一番の時だったのに、聞けなくて悔しかった」と言った。「大丈夫だった？ショック受けたん違う？」と聞いてくれた時に、うちの娘が「だって、大事な話だったもん」と返してくれた。私は意味が分からなかったが、「だって、知らん初めて聞く話だったから」と言った。今までの同和保育、同和教育の中で出てきた言葉だなと思った。「だって、あの人たちが差別されるのはおかしい」と言った娘の言葉に心が動かされた。昨日から、正しい知識という言葉がやたら出てくるが、正しい知識とは、色々な立場の者が、事実と実践を重ね合わせる中で近づけるのかなと思う。調査においても、被差別と言われている人、傍観者と言われている人、加害者と言われている人、色々な人の事実と実践が重なり合って、この差別をどうするのかということで見つかっていくのではないと思う。たくさんの事実と実践が重なり合っていけばいいなと思う。

愛媛 昨日、発言をしたら、たくさんの人が声をかけてくれた。私は、自分の話をするとき、可哀そうだと思ってもらいたくて話をしているわけではない。自分はわからないということ、持っていることが大事だと思う。だから、学ばなければならない。私は、弱音を吐いていたが、これから、あきらめずに、話せる場を作り、一人でも仲間を作りながら続けていきたいと思った。

大阪 虹の会の事務局を行っている。私は、ハンセン病回復者の方と握手をするが、ある時、「あんたは、誰とでも握手をするのか、ハンセン病回復者だから握手をするのではないのか」と言われ、私は、差別者だと思い知らされた。私の妻が美作出身で、美作騒擾について知る機会ができてよかった。

滋賀 自分の差別性を知り、それを語っていくことが大事である。

大阪 35年ぐらい前に美作に行き、話を聞いた。私自身、同和教育に関わる時に差別はいけないと

は思っていたが、自分自身がその立場になった時、自分の差別意識が出てくるのではないかと思う。当時の農民の想いや状況はどうだったのか。その時に、それは仕方なかったというのではなくて、それが差別だと、どんなにきれいごとを言っても、差別だ。だからどうするのかということ、もちろん、授業だけではできないので、いろんなところで伝えていかなければならない、学び続けていかなければならないと思う。

協力者 二日間の報告、討議を四点でまとめたい。一点目は、部落差別がないことにされている、だから、生きづらさをここなら話せる、この人なら話せる、そんな場所を作っていくということ。二点目は、被差別の当事者、あるいは地域の思いや願いを深く受け止め、そこで終わりにせず、次につなげようとしているかということ。三点目は、部落差別の当事者、あるいはハンセン病問題の当事者、差別の問題の当事者とはいったい誰なのか、それは一人一人であるということ。四点目は、それぞれの地域で行われている意識調査のデータは、市民のデータであって、科学的根拠になるものであるからこそ、差別があるかどうかということは、この科学的な調査によって判断されなければならない、そこにどんな事実があるのか、差別の側がどんな意識で作られているのか、そういうことを明らかにし、語り合っていくこと。以上のことを確認しておきたい。